



古墳時代初頭から前期頃の鞆と関連資料の分布

橋本蓮也2014「元智荷古墳の鞆」『元智荷古墳』向日市埋蔵文化財調査報告書第101集を改変して転載

稲部遺跡出土 3世紀の鞆

Yuki, a quiver in the third century, early kofun period excavated from Inabe Site, Hikone City

彦根市文化財課
Hikone City



日本列島の古墳時代初頭から前期の主な鞆と関連資料一覧表

番号	鞆型式	古墳名・遺跡名	所在地	鞆名称	矢筈部		備考
					本体	文様	
1	雲野山タイプ	雲野山	滋賀	雲野山	葦	縹形文様	
2		大迫山1号	広島	大迫山	葦	縹形文様	
3		石塚山	福岡	石塚山		縹形文様	
4	瓦谷タイプ	瓦谷1号	京都	瓦谷	葦	縹形文様	
5		森尾	兵庫	森尾		縹形文様	
6	雲野山・瓦持形帯タイプ	城の山	新潟	城の山	葦	縹形文様	
7	山王寺大崩塚タイプ	山王寺大崩塚	栃木	山王寺	葦	縹形文様	
8		石山	千葉	石山	葦	縹形文様	
9		稲部遺跡193CS02溝	滋賀	稲部	縹形文様	古墳時代初頭集落出土	
10	元智荷タイプ	元智荷	滋賀	元智荷	縹形文様	縹形文様	
11		水空	兵庫	水空	縹形文様	縹形文様	
12		龍山1号	福井	龍山1号	縹形文様	縹形文様	
13		龍山1号	福井	龍山2号	縹形文様	縹形文様	
14	龍山タイプ	波路	兵庫	波路	縹形文様	縹形文様	
15		稲部遺跡	滋賀	稲部	縹形文様	縹形文様	
16		稲部遺跡	滋賀	稲部	縹形文様	縹形文様	
17		会津大塚山	福島	会津大塚山	縹形文様	縹形文様	
18		大塚塚	宮城	大塚塚	縹形文様	縹形文様	
19	園分尼塚タイプ	園分尼塚1号	石川	園分尼塚	縹形文様	縹形文様	
20		会津大塚山	福島	会津大塚山	縹形文様	縹形文様	
21		稲部遺跡1号	滋賀	稲部	縹形文様	縹形文様	
22		雲野山	滋賀	雲野山	縹形文様	縹形文様	
23	会津大塚山タイプ	阿志峠B-26	福岡	阿志峠	縹形文様	縹形文様	
24		城の山	新潟	城の山	縹形文様	縹形文様	
25		城の山	新潟	城の山	縹形文様	縹形文様	
関連資料							
26		稲部遺跡社地区土坑10	奈良	稲部	縹形文様	縹形文様	古墳時代初頭集落出土 部瓦製製品

鞆の型式は杉井隆2013『遺跡と鞆』、『古墳時代の考古学』第4巻（図録の形式と編者）掲載による。



鞆の部分名称
福井市龍山古墳1号(龍山タイプ) 高さ60.0cm

鞆の調査では関係者・関係機関の方々にご指導・ご協力いただきました。

稲部遺跡出土 3世紀の鞆

2024年（令和6年）3月発行

編集・発行 彦根市文化財課
〒522-8501 滋賀県彦根市元町4番2号
Tel : 0749-26-5833
Fax : 0749-26-5899
E-mail: bunkazai@mx.hikone.ed.jp

稲部遺跡 収集写真真 (上) 2号横帯・下2点 1号横帯)

■ 藪とは

藪は、矢尻を上向きにして矢を入れる細長い箱状の武器の一種です。その多くは背負って使われ、背負う際に紐通しに紐を通して結ぶことで体に固定したと推定されます。織物、繊維、革、木、漆を使い、高度な織物の技術、漆工技術、木工技術、革の加工技術等を駆使して専門工房で作られたと考えられます。

藪は主に古墳時代初期から前期に使われ、この時期では北部九州から東北にかけて25例以上が知られます。主に3世紀後半～4世紀の畿内周辺、北陸ルートと瀬戸内ルートの要衝に位置する古墳に副葬され、最上位の首長が権力を誇示する威儀具(いぎぐ)として所持したものと考えられています。

稲部遺跡の藪は、水辺の祭祀に関わる導水施設の溝SD02で板等といっしょに出土しました。時代は、出土土器等から古墳時代初期(3世紀中頃)と考えられます。この藪は、墓に副葬されず、藪が古墳副葬品として確立する時代より古く、近江湖東地域に位置する稲部遺跡の拠点集落で出土しました。

稲部遺跡出土藪の特徴

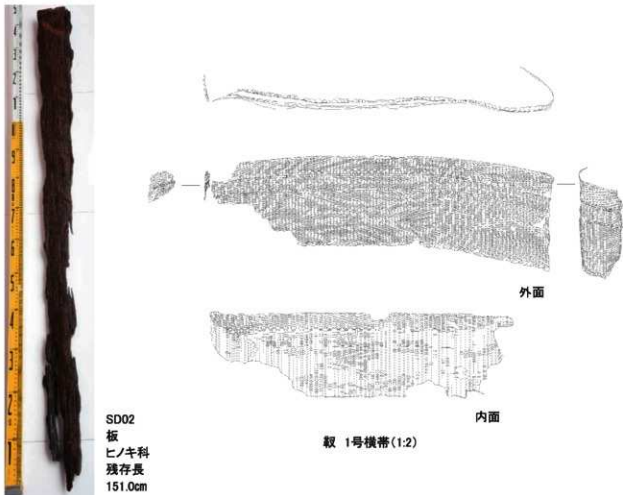
稲部遺跡19次調査(2019年)出土藪は、一つの藪の複数の横帯(1号横帯・2号横帯)とみられ、2号横帯には藪に特有な部分である幅9mmの紐通しが備わります。1号横帯は長軸18.7cm、短軸4.5cm、2号横帯は残存部で長軸17.1cm、短軸12.2cmの大きさです。いずれも1mm程度の厚さです。

■年代 溝出土の土器と放射性炭素年代測定により、庄内式期末に位置する可能性があり、下限は布留式期初頭、3世紀中頃(約1,800年前頃)と考えられます。

■素材 藪は、擦りかけた絹糸を経糸とし、植物繊維を緯糸に使った綾織物(あやおもひ)で、黒色物質を混ぜた漆が塗られています。外面の長辺方向には2条ないし3条の節状の突帯が付き、この突帯にも黒糸が巻き付けられています。

■織組織 織物の大部分は綾織で、綾杉文様を構成しますが、一部に市松文様の織組織があります。綾織物は、経糸が緯糸を2本越し、交差する織組織です。外面は、経糸1本が緯糸2本を越し、次に1本沈む、1単位が3本で構成される「綾三枚綾(たてさんまいあや)」、内面は「綾三枚綾(よこさんまいあや)」と呼ばれる織組織です。

■構造 2本の横帯部分等が残り、漆を塗布した横帯のみが残って矢筒全体が残らないため、矢筒部には革あるいは繊維の有機質が使われた可能性があります。



稲部遺跡出土藪と古墳出現期の近畿

稲部遺跡の藪は、横帯と紐通しの形態、織組織において、3世紀後半から末以降の古墳時代前期に属する古墳に副葬された藪と共通点が認められ、古墳副葬藪に矢筒部の形、織組織、デザインが引き継がれたと考えられます。

3世紀の近畿では絹糸を利用した絹織物は貴重であり、素材となる絹糸や綾織の紡織技術あるいは綾織物による製品が大和盆地や近江地域に将来されたと考えられます。どのように外来的な素材、技術あるいは希少な繊維製品がもたらされたのか、同時代の他の絹糸を用いた繊維製品等との関係性のなかで考えていく必要があります。

稲部遺跡の藪の調査研究によって、3世紀の織物の技術、日本列島の古墳出現期における藪の出現と系譜、古墳時代初期の社会を考える上で大きな手がかりが得られると期待されます。



織組織
繊維を組み合わせた針葉樹製の木製品
残存長20.4cm、残存幅6.1cm



炉材と推定される土製品
残存長3.3cm 残存幅3.65cm
残存厚1.6cm



ガラス丸玉
鉛ガラス製
1.14cm × 1.22cm 4.0g



桃の種 残存長1.9cm

SD02溝で出土した遺物

